

# 欧州 Piers 調査報告書 (ベルギー・オランダ・ドイツ) 2018

PIERS 研究会 2018 欧州棧橋調査団

[第6回 PIERS フォーラム「2018 欧州棧橋現地調査の報告」](#)

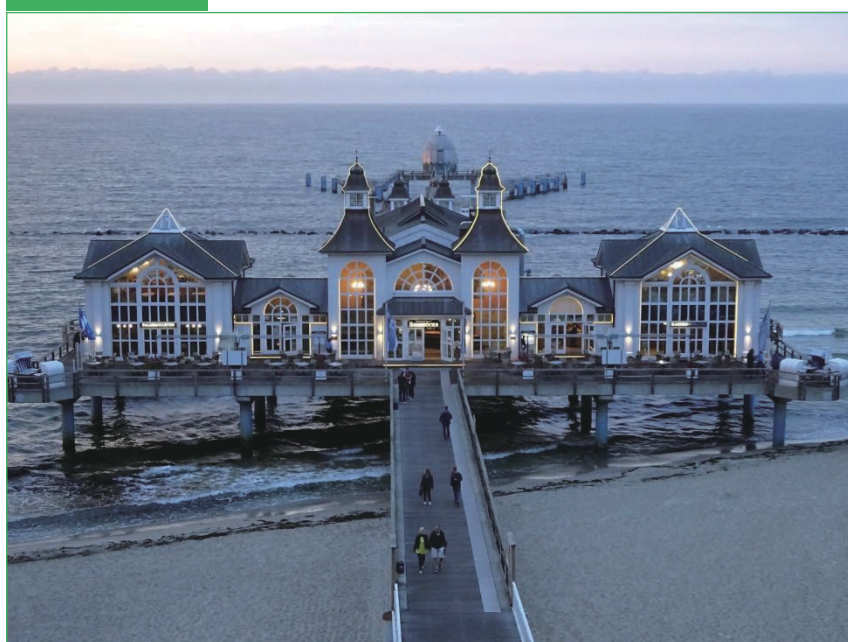
(平成31年1月31日) で報告されています

# 欧州 Piers 調査報告書 2018

(ベルギー・オランダ・ドイツ)

平成31年 1月

PIERS研究会  
2018欧州栈橋調査団



## はじめに

PIERS 研究会がイギリスの栈橋の調査を始めた最初の年から、それを聞いた多くの方々から「栈橋ならアメリカにたくさんある」とか「ドイツにもある」と云う情報が寄せられた。しかし「(不思議な) 栈橋」の発祥地と思われるイギリスの栈橋を極めようと決心し、3年間はイギリスの栈橋の調査に集中した。その結果、現存する栈橋のほとんどを訪れ、一つ一つを体験(体感)することが出来た。その成果は年度ごとに報告書としてまとめられている。イギリスの栈橋について、日本語で書かれた資料でこれらの右に出るものはないと言っても過言ではないだろう。

栈橋の構造は簡単である。海中に杭を打ちその上にデッキを設ければ、もう立派な栈橋である。したがって多くの方から「栈橋なら〇〇にもありますよ」という情報を教えていただく度に、「我々の探求しようとしているのは、その栈橋を利用して海の上を歩き、海風に触れ、さえずるもののない海の眺めを楽しみ、振り返って我が街の景観を確認するもの(Promenade Pier)なのだが」という、不安が常に付きまとっていた。この2年間に筆者が国際シンポジウムや別の調査のために訪れたフィジーやスウェーデンでも「栈橋」に遭遇した。フィジーでは先端にやしの葉で屋根を葺いた東屋を持つ栈橋、スウェーデンではマルメ市の郊外に10基の栈橋が建設されていた。前者の目的は宗主国イギリスの栈橋に近いのではと感じたが、後者は海に下りる階段がついており栈橋上あるいは陸地部にサウナ小屋があることから明らかに冷水浴のための栈橋である。

中世のヨーロッパの上流家庭に子弟を育てるための「大旅行 The Grand Tour」と言う習慣があった。将来立派な貴族となるために身につけておかなければならない歴史、文化を学ぶために、教師あるいは従者を連れて馬車で長期間の国外旅行をする。「大旅行」だけでなく、外国の王族との通婚も珍しいことではなかった。この「大旅行」の風習や王族間の通婚のおかげで、指導者(王族、貴族)は広く外国の知識に通じていたから、ヨーロッパの各国では異国(異民族)であるにもかかわらず、類似の建物、街づくり、風習等が生ずることになったのではないかと思う。しかし形は伝わってもその精神まで伝わるのは難しいのではないか。

テムズ川河口部のマーゲートにイギリスで最初の栈橋が建設されたのは1810年であり、第1次の栈橋建設ブームが始まるのが1860-70年代であるが(2013年報告書 p.13)、今回訪れたブランケンベルへの栈橋はそれから間もない1894年に建設されている。今回三カ国の栈橋を訪れてひとつひとつを体験しながら、栈橋の形は同じであるがイギリスの栈橋とは異なるものがあ

るように感じた。

イギリスの栈橋は規模の大小、構造の立派さなどはそれぞれ異なるものの、一部を除けば「海の上を歩き、海風に触れ、遮るもののない海の眺めを楽しみ、振り返って我が町を見る」という基本的な目的が貫かれていたように思うが、欧州に渡った栈橋にはその精神が徹底されているとは感じられなかったことだ。それは、栈橋の目的に対する「これで良いのだ」という自信が希薄なためではないか。ブランケンバルへの栈橋に海岸リゾートの魅力を高めることを期待しているとは思えない。スヘフェニンゲンの栈橋は経営に不安があったのか、これでもかというほどリゾート施設が付加され、収益をあげられるようになっている。ドイツの栈橋は、明らかに海からのアプローチ機能に存在の根拠を置いている。いずれも、都会生活をする上流階級の人々が散策の場として公園 (Pleasure Garden) が作られ、それが海の上に展開されたというイギリスの栈橋の原点のようなもの (2013 年度報告書 p. 11) が希薄である。

これらの差がどこから来ているのか。『元祖』とあるのが本物。『本家』は偽者と訳知り顔をする者をネタにする落語があったように記憶しているが、我が国の港湾や海岸空間の魅力を高めていくためにいずれを栈橋の存在意義の「元祖」とし、いずれを「本家」とするのか、栈橋の調査を広げれば広げるほど、様々なバリエーションが出てくると思われる。さらに、栈橋が前面あるいは近傍にあると無かろうと海浜の背後には海を眺めながら散策する路 (エスプラナード) が整備されていたことを思うと、栈橋に付随してエスプラナードが整備されたのではなく、エスプラナードから「海を眺め、海風にあたる」という栈橋 (Promenade Pier) が生まれたのではないかとも思えてくる。これらをどう整理して我が国の海岸リゾートや港湾空間の魅力の向上に役立てるか、今回の調査は整理すべき課題を浮かび上がらせてくれたのではないかと感じている。

(執筆者 ; 栢原 英郎)



フィージーの栈橋



マルメ (スウェーデン) の栈橋

# 目次

はじめに

## 第1章 調査の目的と概要

- 1. 1 調査の経緯と目的 ..... 1
- 1. 2 調査の概要（調査団編成、調査行程） ..... 2

## 第2章 調査した栈橋及び沿岸の特徴

- 2. 1 調査した栈橋及び海岸リゾートの概要 ..... 9
  - 2.1.1 ベルギー
  - 2.1.2 オランダ
  - 2.1.3 ドイツ
- 2. 2 北海及びバルト海沿岸の自然条件の概要 ..... 27
  - 2.2.1 ベルギー
  - 2.2.2 オランダ
  - 2.2.3 ドイツ
  - 2.2.4 北海の現況
  - 2.2.5 バルト海の現況

## 第3章 ベルギーの栈橋

- 3. 1 ブランケンベルヘ栈橋基礎情報 ..... 31
- 3. 2 沿岸域の概要 ..... 32
  - 3.2.1 海岸リゾート開発の歴史
  - 3.2.2 現況と特徴
- 3. 3 ブランケンベルヘ栈橋 ..... 39
  - 3.3.1 歴史
  - 3.3.2 現況と特徴

## 第4章 オランダの栈橋

- 4. 1 スヘフェニンゲン栈橋基礎情報 ..... 56
- 4. 2 沿岸域の概要 ..... 57
  - 4.2.1 海岸リゾート開発の歴史
  - 4.2.2 現況と特徴
- 4. 3 スヘフェニンゲン栈橋 ..... 77
  - 4.3.1 歴史
  - 4.3.2 現況と特徴

第5章 ドイツ・リュージェン島の栈橋	
5. 1 リュージェン島の現況と特色	83
5.1.1 現況と特徴	
5.1.2 海岸リゾート開発の歴史	
5. 2 ゼリン栈橋	91
5.2.1 ゼリン栈橋の基礎情報	
5.2.2 歴史	
5.2.3 現況と特徴	
5. 3 ビンツ栈橋	99
5.3.1 ビンツ栈橋の基礎情報	
5.3.2 歴史	
5.3.3 現況と特徴	
5. 4 ゲーレン栈橋	107
5.4.1 ゲーレン栈橋の基礎情報	
5.4.2 歴史	
5.2.3 現況と特徴	
5. 5 栈橋地域以外の観光拠点	114
5.5.1 ザスニッツ	
5.5.2 プローラ	
5.5.3 プトゥブス	
第6章 ドイツ・ウーゼドム島の栈橋	
6. 1 ウーゼドム島の現況と特色	123
6.1.1 現況と特徴	
6.1.2 海岸リゾート開発の歴史	
6. 2 ツィノヴィッツ栈橋	131
6.2.1 ツィノヴィッツ栈橋の基礎情報	
6.2.2 歴史	
6.2.3 現況と特徴	
6. 3 コサート栈橋	140
6.3.1 コサート栈橋の基礎情報	
6.3.2 歴史	
6.3.3 現況と特徴	
6. 4 バンシン栈橋	149
6.4.1 バンシン栈橋の基礎情報	
6.4.2 歴史	
6.4.3 現況と特徴	
6. 5 ヘリングスドルフ栈橋	161
6.5.1 ヘリングスドルフ栈橋の基礎情報	
6.5.2 歴史	

6.5.3	現況と特徴	
6.6	アールベック栈橋	170
6.6.1	アールベック栈橋の基礎情報	
6.6.2	歴史	
6.6.3	現況と特徴	
6.7	ポーランド国境周辺の状況	179
6.7.1	ポーランド国境	
6.7.2	スフィノウィシチェ海岸	
第7章 視察した欧州栈橋の比較と考察		
7.1	視察3か国の休暇旅行の実態	183
7.1.1	欧州全体の休暇旅行の現状	
7.1.2	休暇旅行における欧州沿岸地域の位置づけ	
7.1.3	宿泊旅行におけるベルギー・オランダ・ドイツの比較	
7.1.4	ドイツの休暇旅行の特徴	
7.2	海岸リゾートの開発と経営	198
7.2.1	スヘフェニンゲンの発展—停滞と再生	
7.2.2	海岸リゾートの発展サイクル	
7.2.3	海岸リゾートの発展に向けた取組み	
7.3	欧州三か国における栈橋の特徴と日本での応用	210
7.3.1	栈橋と海岸利用の概要	
7.3.2	栈橋のある海岸の親水空間構造	
7.3.3	栈橋の特色に影響する条件	
7.3.4	各国栈橋の特色のまとめ	
7.3.5	日本に应用できる智恵	
7.4	欧州三か国における海岸整備の特徴と日本での応用	252
7.4.1	北海沿岸諸国における海岸整備の考え方	
7.4.2	英国及び欧州三か国における海岸整備の特徴	
7.4.3	日本での応用	
むすび		
資料		
1.	収集した図書一覧	299
2.	調査団アルバム	300
3.	旅の記憶	307
(1)	ブルージュ	
(2)	ハーグ	
(3)	ベルリン	
(4)	食事と飲み物	

## 第1章調査の目的と行程

### 1. 1 調査の経緯と目的

2018年のPIERS研究会（以下、研究会）の栈橋調査は英国とは海を隔てて対岸にある欧州の北海およびバルト海の栈橋について調査することに決定された。

研究会は2013年～2015年の3カ年に渡り英国の栈橋（Piers）の調査を行った。「英国の栈橋（Piers）とはどんなもの？」という興味から調査がはじまったが、年を重ねる毎に英国の栈橋の魅力に惹かれるとともに、人々が栈橋を中心とした海岸リゾートの生活を楽しむ姿に感動した。これまで英国沿岸の56基の栈橋を視察した。この200年間に英国で建設された栈橋は約100基と見なされ、そのうち現存している59基のほとんどを見ることができた。その結果、「栈橋（Piers）は英国が発明した海の上を歩き楽しむ不思議なインフラ」であると定義するに至った。また、「栈橋（Pier）を日本に」の思いも強くなった。

英国の栈橋の発展は、英国の海岸の地形的特性である遠浅、背後の海岸段丘、海の持つ健康上の効用、産業革命の成功による技術の進歩と経済的繁栄、労働からの解放と余暇の拡大といった社会経済的な多くの要因によるもので、鉄道の普及に伴い民間資本による栈橋建設が盛んに進められた。現存する栈橋は火災による焼失、高波による破壊、さらには戦争による改変に耐えて今日まで利用されてきている。建設当時のヴィクトリア朝様式の壮麗なパビリオンを有する栈橋は数少なくなっているが、100年以上も維持利用され続けていることに英国国民の栈橋への愛着の深さと栈橋の魅力の大きさを感じることができる。

英国での栈橋建設に触発されて欧州大陸でも多くの栈橋が建設された。北海に面したベルギーのブランケンベルヘ栈橋 - 1894年供用開始、オランダのスヘフェニンゲン栈橋 - 1901年、バルト海に面したリュージェン島のゼリン栈橋 - 1906年、ビンツ栈橋 - 1902年、ゲーレン栈橋 - 1898年、ポーランド国境に近いウーゼドム島のツィノヴィッツ栈橋 - 1908年、ヘリングスドルフ栈橋 - 1893年、アールベック栈橋 - 1899年などが相次いで建設された。当時の絵ハガキを見るといずれも栈橋入口付近には大規模な建物を伴っており、本場英国の栈橋と遜色のない堂々としたものである。英国における栈橋の建設は下火になっていた1900年代に入ってからのもが多いが、海（海水浴）が健康によいという思想の拡がり、鉄道の普及、先進地からの技術導入などが契機になったと思われる。

ベルギーのブランケンベルヘ栈橋、オランダのスヘフェニンゲン栈橋は北海に面しており北海の冬の荒波に耐えうるだけの大規模な構造を有している。前者は巨大な海岸堤防で防護された背後のホテルやマンション群を背景に沖合に突出した栈橋でその規模と構想に感銘を受ける。後者はこれまでよく見られた栈橋とは異なり、栈橋上に施けられたパビリオンやレジャー施設がメインの栈橋から枝分かれした栈橋に独立して設置されているものである。栈橋機能の追加、増強が容易に可能である。新しい栈橋の可能性を感じられる。

北海沿岸の大規模な栈橋に比べドイツのバルト海に面した海岸リゾートは長い海岸線に



連担して続き、その海岸リゾートに比較的小規模な栈橋が建設され、海岸線に栈橋が点々と並んでいる。栈橋の先端には船着場があり瀟洒レストランが併設されているものもある。海岸リゾートと栈橋との関係を含め興味深いものがある。しかし、欧州の栈橋については事前調査では資料が乏しく手探り状態であった。まとまった資料のない中、現地における調査の重要性が高まるとともに成果が期待されることとなる。欧州人のバカンスに対する意欲の高さを考えるとどんな真実を掴むことができるか楽しみに現地に入った。

ドイツの栈橋の調査については、東京大学名誉教授の中村英夫先生から度々資料を提供していただき、今回調査の大きな契機になった。ご指導に心から感謝申し上げる次第である。

## 1. 2 概要

### (1) 調査団

研究会は英国をはなれ、はじめて欧州大陸のベルギー、オランダ、ドイツの海岸リゾートの調査を実施することになった。日程は2018年7月8日(日)～7月16日(月・祝)である。

調査団の結成にあたって、英国栈橋調査を3ヵ年に渡り共同して実施してきた(一財)沿岸技術研究センター(CDIT)、(一財)みなと総合研究財団(WAVE)及び(一財)港湾空港総合技術センター(SCOPE)に引き続き参加を要請するとともに、2013年と2014年に調査に参加いただき、栈橋とわが国海岸リゾートに高い関心を持つ民間建設会社、コンサルタント会社に欧州栈橋調査への参加を要請したところ、以下に示す総勢17名の調査団が結成された。6月19日(火)に事前打合せ、7月3日(火)に出発前の結団式を(一財)港湾空港総合技術センター会議室にて行った。

なお、幸運にもウィーン在住のベルリンで大学生を送られたピアニストで音楽評論家の山田亜希子さんが、調査団として不安のあるドイツ内での通訳・アドバイザーを買って出ていただくことになった。特にドイツ国内での活動が支障なく円滑に行えたのは山田さんのお力添えによるものである。心から感謝申し上げます。



写真1. 1 調査団18名(7月15日: Hotel Riu Plaza Berlin)

## (2) 調査日程

ベルギー、オランダ、ドイツの海岸リゾートの調査対象栈橋は図1. 1に示す通りである。図1. 1の上図には行程（利用する交通機関および宿泊地）も示されている。

英国の栈橋調査でバス借上げの利点を痛感したので3ヶ国をバスで周遊することを検討したがオランダ、ベルギーとドイツのバルト海の栈橋を全行程バスで調査するのは時間的にも経済的にも大きな負担となることが判明した。このためオランダ、ベルギーと、ドイツでの調査において別々にバスをチャーターすることとし、その間は鉄道、航空機を乗り継いで時間と経費を節減することとした。

オランダ、ベルギーは日本からの航空機の到着に伴う送迎もあり、今回航空機の予約と宿泊ホテルの予約を依頼した（株）近畿日本ツーリストコーポレートビジネスにバスの手配をお願いした。バス代を安くするため、1日でブリュッセル（ベルギー）→ブランケンベルヘ→スヘフェニンゲン（オランダ）をまわり、あとは自力で行動することとした。このためベルリンへの移動はスヘフェニンゲンの宿からトラムと鉄道を乗り継いでスキポール空港に向かい飛行機に搭乗した。

ドイツ国内の調査は対象も多く、栈橋調査に便利な鉄道もないため、栈橋の多くの利用者と同じく自動車に頼らざるを得なかった。英国でのバス会社との交渉経験を活かし、井上副団長がベルリンのバス会社の選定、日程と料金の交渉を行った。いろいろな課題をクリアし、ベストチョイスとしかいいようのないバスを選定することが出来た。

井上副団長の御苦勞の成果である。

行程検討では調査栈橋の増加や周辺の関連施設の調査などによりかなり厳しい行程となることになった。団員はもちろんバスも運転手もよく機能し全行程を無事踏破できたことは幸運であった。

調査を円滑に進めるためには宿泊ホテルと食事が重要である。宿泊ホテルについては、スヘフェニンゲン栈橋の正面にあるクアハウスで連泊した。

24時間の栈橋を調査するには十二分

であった。ドイツもリゾート地であるが日本からの団体が行かないような場所であるので決定には手間取ったが、ゼリンもヘリングスドルフも各栈橋群の中心に宿泊することが出来た。

ヘリングスドルフのホテルは町の中心にあるのに日本人を泊めるのは初めてと聞いて驚いた。



写真1. 2 ドイツ国内の調査に使用したバス

## 2018 年 PIERS 研究会欧州棧橋調査行程

目的地 : ベルギー、オランダ、ドイツの海岸リゾート棧橋の視察

2018年7月8日(日)～7月16日(月・祝)

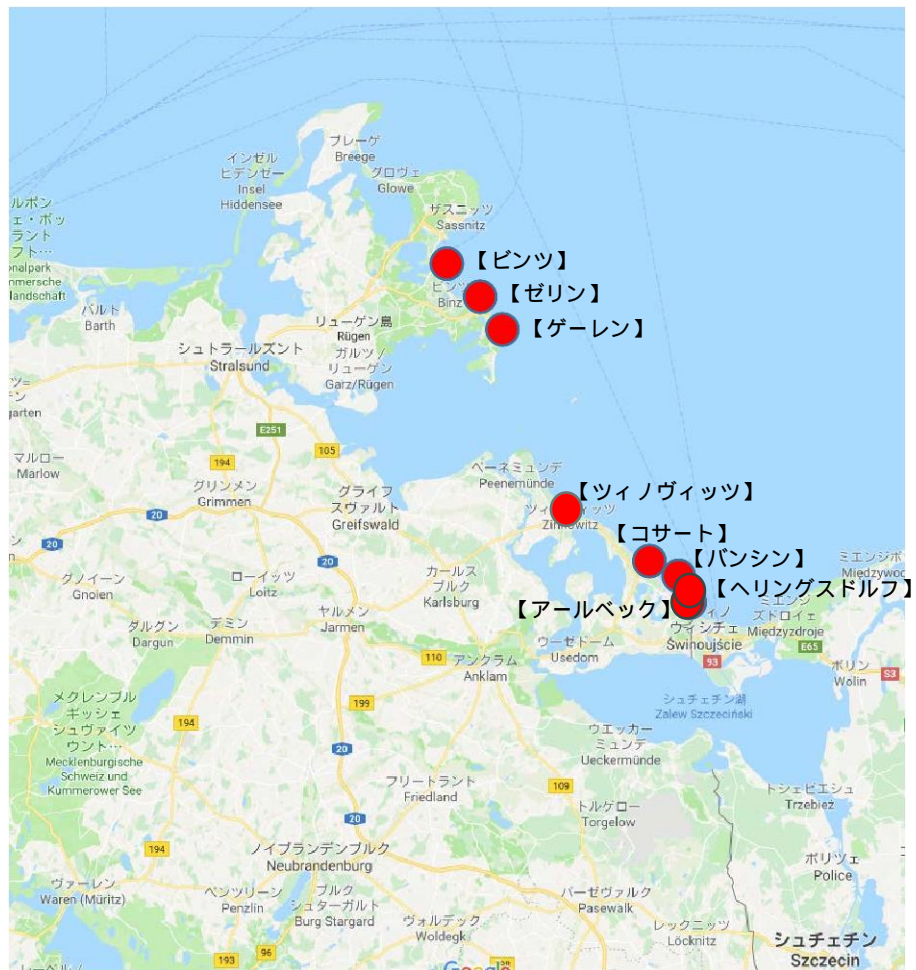
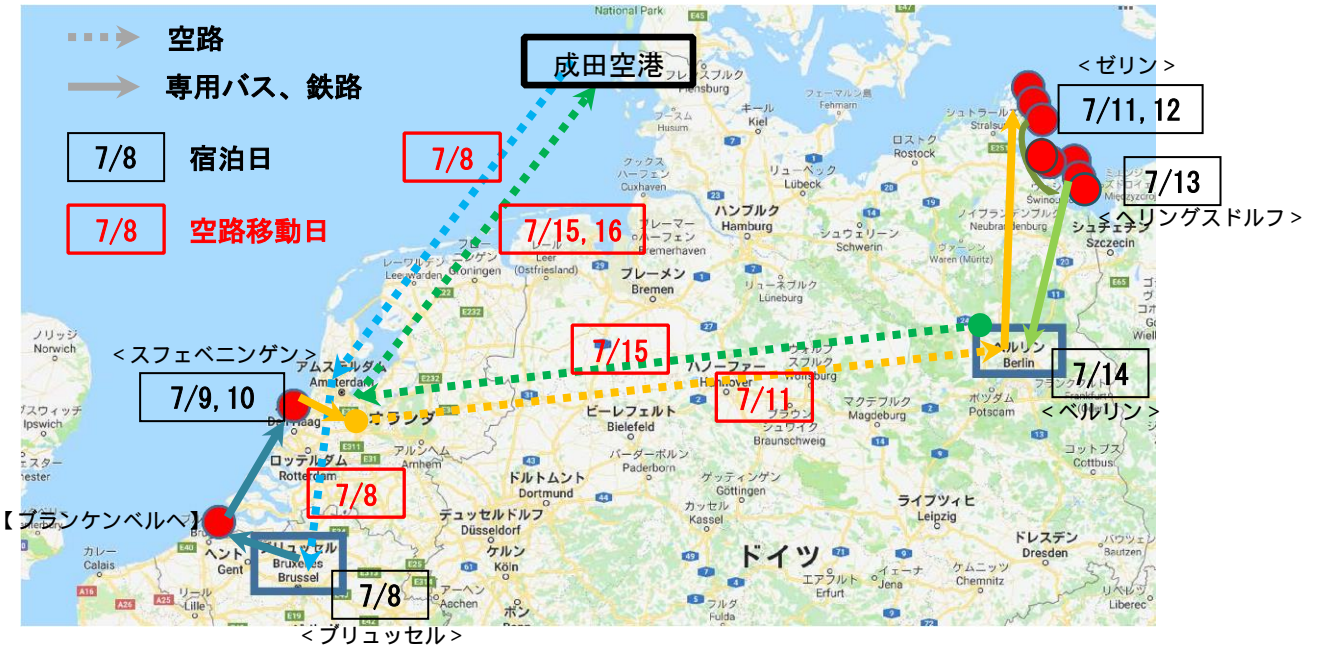
参加者 : 17名

	行 動	宿泊地
07/08 (日)	東京/成田空港(10:30 発、KL862)⇒<飛行機> ⇒ (15:10 着 アムステルダム乗継 16:55 発、KL1731) ⇒<飛行機>⇒ (17:40 着)ブリュッセル空港⇒【バス】⇒ブリュッセル	<ベルギー> ブリュッセル
07/09 (月)	【終日バス】 ブリュッセル⇒ブルージュ⇒ <b>ブランケンベルヘ棧橋</b> ⇒ スヘフェニンゲン	<オランダ> スヘフェニンゲン
07/10 (火)	スヘフェニンゲン⇒《トラム》⇒デン・ハーグ視察⇒ 《トラム》⇒ <b>スヘフェニンゲン棧橋</b> ⇒スヘフェニンゲン	<オランダ> スヘフェニンゲン
07/11 (水)	スヘフェニンゲン⇒《トラム》⇒ハーグ中央駅⇒《鉄道》⇒ アムステルダム/スキポール空港 (12:30 発、KL1825) ⇒ (飛 行機) ⇒ (13:45 着) ベルリン/テーゲル空港⇒【バス】⇒ リュージェン島 (ゼリン)	<ドイツ> ゼリン
07/12 (木)	【終日バス】 リュージェン島内、 <b>ゲーレン棧橋、ゼリン棧橋、ビンツ棧橋、</b> ザスニッツ、プローラ、プトゥブス⇒ゼリン	<ドイツ> ゼリン
07/13 (金)	【終日バス】 リュージェン島⇒ウゼドム島内、 <b>ツィノヴィッツ棧橋、コサー</b> <b>ト棧橋、バンシン棧橋、ヘリングスドルフ棧橋、アールベツ</b> <b>ク棧橋、スフィノウィシチェ (ポーランド) ⇒</b> ヘリングスドルフ	<ドイツ> ヘリングスドルフ
07/14 (土)	【終日バス】 ヘリングスドルフ⇒ベルリン⇒ベルリン市内視察⇒ ベルリン	<ドイツ> ベルリン
07/15 (日)	ホテル⇒【バス】⇒ベルリン/テーゲル空港 (12:15 発、 KL1824) ⇒ (飛行機) ⇒ (13:35 着アムステルダム乗継 14:40 発、KL861) ⇒ (飛行機) ⇒	機中
07/16 (月)	⇒ (8:40 着)東京/成田空港	

日本との時差 ベルギー・オランダ・ドイツとも、7時間前 (サマータイム)

日本午前7時→現地前日の真夜中 日本午後3時→現地午前8時 日本午後11時→現地午後4時

ベルギー、オランダ、ドイツの海岸リゾート棧橋視察MAP



## <調査団員名簿>

団 長	: 古土井 光昭	PIERS 研究会会長	PE ネット代表
副団長	: 栢原 英郎	PIERS 研究会監事	(公社) 日本港湾協会名誉会長
副団長	: 井上 聰史	PIERS 研究会副会長	政策研究大学院大学客員教授
副団長	: 岩城 正典	PIERS 研究会理事	東亜建設工業 (株)
総務主査	: 布施谷 寛	PIERS 研究会理事・事務局長	
会計主査	: 八尋 明彦	PIERS 研究会理事	日本工営 (株)
団員	: 市川 雅也	いであ (株)	
	菅野 真弘	(一財) 港湾空港総合技術センター	
	菊池 正昭	奥村組土木興業 (株)	
	首藤 啓	(一財) みなと総合研究財団	
	高松 宜応	東洋建設 (株)	
	長廻 幹彦	若築建設 (株)	
	中島 隆元	奥村組土木興業 (株)	
	林 規夫	五洋建設 (株)	
	宮下 奈緒子	日本工営 (株)	
	横田 煌	寄神建設 (株)	
	吉田 將	ニシキコンサルタント (株)	
アドバイザー	: 山田 亜希子	ピアニスト・音楽評論家	

### 国内連絡先

代表 : 大野 正人 PIERs 研究会理事 (一財) 港湾空港総合技術センター

(注) 団員はアイウエオ順、企業における役職は省略。